

Title	新撰洋學年表, 大槻如電著
Sub Title	
Author	幸田, 成友(Koda, Shigetomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.147- 148
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

流布本は少いと信ずる。

尊經閣本の色葉字類抄は「可なり實用に供せられたと見え、紙面にはなか／＼手擦や汚損が多い」とあるが、文字を見ると、實に優麗で、たしかに原本の著作と同時代かそれでもなくとも決して遠く隔たらぬ時代の書寫と見え、希世の珍であるが、惜しむらくは完本でない、中巻を缺くのみか、下巻に於ても一部の闕佚がある。従つて賞翫愛撫の點に於ては之で充分であるが、實用に供する場合には不足である。尊經閣には本書の永祿寫本を藏せられて居ると聞けば、本書の不足分を永祿本によつて補はれたなら、書物を愛する者にも讀む者にも雙方に便宜であらうと、望蜀の念を書添へる次第です。(幸田成友)

圖録繪卷物小釋

松岡映丘著

鎌倉時代を中心として、その前後に行はれた繪卷物は、自分等の立場からいつても、大いに尊重に値するものと思ふ。大和繪といふその名が示す通り、畫題を日本にとり、畫面にあらはれる裝飾や調度が、すべて製作當時のものであるからである。是等繪卷物の名稱や筆者や所藏者を録したのものには、古く

本朝畫圖品目

源嵩年輯

天保四年刊

がある。之は大坂の惣年寄野里梅園が出版した小冊子で希本である。それから住吉家て出した倭にしきといふ一枚摺も多少參考になるが、一枚摺では明治十七年に出版された

大倭畫名卷鏡

柏木貨一郎著

が頗る賞揚すべきものと思ふ。柏木氏は名高い好事家で、所藏も多かつた。それから博物館で出版した黒川眞頼博士の考古畫譜のことは、周知であるから略す。

松岡氏の著は現在に於ける繪卷物の目錄として、以上の諸書と共に座右に備ふべき良書である。たゞし自分等の希望をいへば、解釋をもつと承はりたく、又挿畫があまりに小さいのを遺憾とする。尤も是等は出版書林が代價を廉くするために起つたことであらうが、之を第一として自分等は松岡氏の第二、第三の著述に接したい。(幸田成友)

新撰洋學年表

大槻如電著

大槻如電先生の「新撰洋學年表」が出版になつたことを、先生のために又學界のために慶賀したい。本書の前版は日本洋學年表と題し、明治十年十一月の出版で、今から四十五年前である。美濃判大の活版本で本文二十三枚、之に例言・序論・題文・正誤各一枚を添へ、紙數合計二十六枚、黄色の表紙をつけて和製本である。今回出版の新撰洋學年表は之と比べると、著しい相違を見る。裝訂は黄表紙が冊表紙にかはつた位であるが、内容は例言一頁・索引十五頁・本文百五十八頁よりなり、例言索引は活版であるが、本文は全部著者の自筆稿本をそのまま金屬版としたもの故、蠅頭の文字ではあるが、先生の筆癖が能く窺はれる。

新舊の兩版を比較して自分等は先生の根氣強きに驚歎し、且これにあやかりたいと思ふ。初版は内國勸業博覽會に出品するため、

取急いで脱稿印刷せられたことは、卷末の記文に、「此表ハ本年三月九日内國勸業博覽會ニ出サン事ヲ乞ヒ、原稿ヲ定整シテ四月六日前記先成リ、五月十一日出品ノ許可ヲ得タリ、七月一日正記稿ヲ脱ス……十一月十一日ニ至リ始テ活版印行ニ付スル事ヲ得タリ」とあるので解る。勿論本書の原稿は疾に出来てゐたものであらうが、その整理と印刷とは比較的短時日を以てなされたものであらう。然るに今回の新版は出版までに實に少からざる年月を費してゐる、即ち例言によると、大正五年八月から同八年八月までに第一稿を、九年十月から十年十二月までに第二稿を了り、十二年一月から清書にとりかかり、全部未だ成らざるに、例の九月の大震災に遭遇され、先生は原稿を抱いて根岸の文彦博士の宅へ逃げられたとある。それ以來空しく二年を過ぎ、十五年に至つて出版に従事することとなり、昭和二年一月を以て出版になつたのである。七十一歳で第一稿を起し、八十二歳で印刷を成功された先生の根氣に對し、自分等後輩は謹んで満腔の敬意を表するものである。

先生の王父君磐水先生が日本に洋學を開かれた最大有力者であることは申す迄もない。御家柄といひ、又先生多年の注意と蒐集とによつて、山の如く積まれた史料の中から、この年表を作られたのであるから、自分等は有難く之を座右に備へて參考に致さう。

(幸田成友)

洛北 修學院村道しるべ

杉浦三郎兵衛編

洛北の修學院村は比叡の西麓爽塏の地に在つて、西南は遠く京畿の山川を眺め、其の離宮林泉の勝風に天下に聞え、昔は櫻花の盛を以て鳴り、今は紅楓の美を以て稱せらる。この妙境に俗塵を絶つて悠悠自適する丘園杉浦三郎兵衛翁は其のゆかりを以て舊修學院村内の名勝を古書古圖に據り、或は實地踏査に據つて親しく調査し、離宮を始め五十有餘所に就いて其の沿革を記述せられ、それに又『修學院關係參考圖書』と題して、翁の書屋雲泉文庫に珍藏の書籍百七十有餘點、地圖約九十種の目錄(書名、編者名出版年月等)と『雲泉莊』竝に其の泉亭等の由來記を附載して冊子とし、弘く江湖に頒布せられた。本會も亦其の恩惠に漏れずして一部を寄贈せられた。本會は謹んで翁に敬謝の意を表し且つ翁の老ひて盛々壯なる事を祈る次第である。(武田勝藏)